一般財団法人 JR 東日本文化創造財団
MoN Takanawa: The Museum of Narratives
Barbican Centre

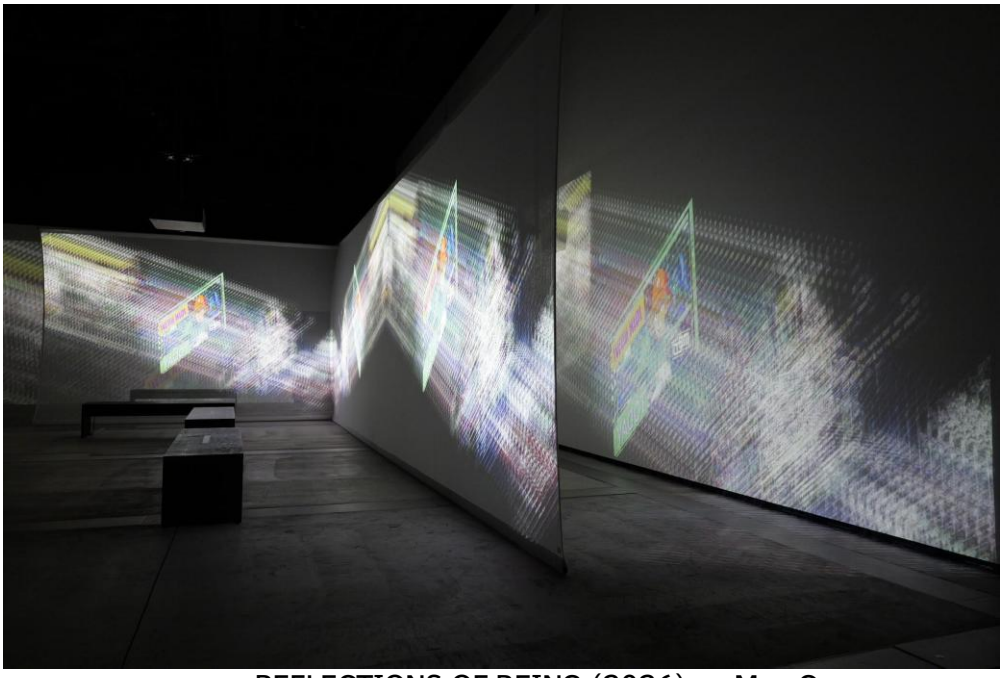
2026 年 11 月 19 日

英国名門 Barbican Centre 発

耳ではなく、身体全体で「音」を感じる没入型サウンドエキシビション（展覧会）

「Feel the Sound」展、日本初開催

東京展ならではの新たな展示構成で開幕



REFLECTIONS OF BEING（2026） Max Cooper

MoN Takanawa: The Museum of Narratives（東京都港区／運営：一般財団法人 JR 東日本文化創造財団）は、英国を代表する総合文化施設 Barbican Centre（バービカン・センター）との共同制作による没入型サウンドエキシビション（展覧会）「Feel the Sound」を、いよいよ 2026 年 11 月 20 日（金）に開幕いたします。

本展は、ロンドンのバービカン・センターで多くの来場者を熱狂させた話題の展覧会であり、待望の日本初上陸となります。音や振動、音楽、そして先端テクノロジーが融合した多彩なインスタレーションを通じて、「音を耳で聴くだけではなく、身体全体で感じる」という、従来の鑑賞の枠を超えた全く新しいイマーシブ体験を提供します。

東京開催にあたっては、バービカン・センターで公開された作品群に加え、新作3 作品を追加するとともにさらに、一部作品を東京会場にあわせて再構成。展示空間や体験設計をアップデートし、ロンドン展からさらに発展した東京展ならではの展示構成を実現しました。
本リリースでは、開幕にあわせて会場の展示風景を公開するとともに、東京展ならではの新作やアップデートされた作品群の見どころをご紹介します。また、会期中にはアーティストによるトークイベントやガイドツアー、音楽プログラムなど関連イベントの実施も予定しており、展覧会体験をさらに多角的にお楽しみいただけます。

■本展キュレーター Luke Kemp コメント

「Feel the Sound」は、音を聴くという行為そのものを見つめ直し、音との新たな関係性を探求する展覧会です。東京展では新たな作品や展示構成を加え、ロンドン展からさらに発展したかたちで紹介できることを大変嬉しく思います。本展が、来場者一人ひとりにとって新しい“聴き方”や世界との向き合い方に出会うきっかけになれば幸いです。」

■東京展ならではの展示構成

本展では、ロンドン展で公開された作品群をベースに、東京開催にあわせて新作3作品を追加展示します。また、一部作品については展示空間や体験設計を見直し、東京会場の特徴を活かした演出へとアップデートしました。

高輪ゲートウェイシティという新たな文化発信拠点での開催にあわせ、作品と空間の関係性をより深める展示構成を実現。ロンドン展を鑑賞した来場者にとっても、新たな発見と体験が得られる内容となっています。

今回追加される新作3作品は、ピクシーダストテクノロジーズの「SOUND HUG」とイッチー＆ハイオカの新曲「THE TEXTURE OF SOUND v2.0」を組み合わせた作品、ハリー・イェフ（REEPS100）&チュン・バオによる「VOICE GEMS: 1000 YEAR ARCHIVE」、穴井佑樹による「RE-FILTER」です。振動と光、声、色彩といった異なる切り口から、音を身体で受け止める体験を提案します。

■会場で体験できる注目ポイントと見どころ

＜音を身体全体で感じる体験＞

「Feel the Sound」展では、音を耳で“聴く”だけでなく、振動や共鳴、光や空間演出を通じて身体全体で“感じる”体験を提供します。作品の中に入り込み、歩き、触れ、ときには立ち止まりながら、来場者それぞれが音との新たな関係性を発見できる展覧会です。

＜来場者参加型作品＞

本展には、来場者自身の声や動き、身体的な体験が作品の一部となる参加型作品も数多く登場します。一方的に鑑賞するのではなく、自ら関わることで作品が成立し、他者との体験共有を通じて新たな発見が生まれます。来場者自身が展覧会を構成する存在となることで、体験はより豊かなものへと広がっていきます。

＜音とテクノロジーが融合する空間＞

サウンドアート、音楽、メディアアート、AI、センシング技術など、多様なテクノロジーと表現手法が融合した作品群を展示します。目には見えない音やデータの存在を可視化・体感化することで、私たちを取り巻く環境や社会との新たな向き合い方を提案します。

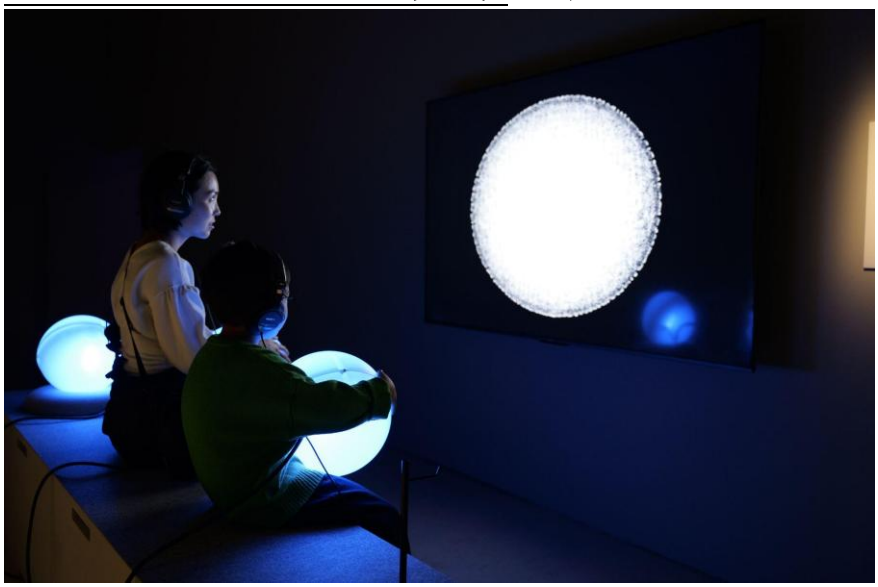
いずれの作品も、見るだけでなく、触れる、動く、声を出す、他者と体験を共有するなど、来場者自身の関わりによって体験が広がります。作品との距離や他者との関係性によって感じ方も変化し、一人ひとり異なる体験が生まれます。音を「聴く」という行為そのものを見つめ直し、これまで気づかなかった感覚や発見に出会える場が会場全体に広がっています。

■注目作品

＜東京開催にあわせて追加された３作品>

SOUND HUG（2018）　ピクシーダストテクノロジーズ

THE TEXTURE OF SOUND v2.0（2026）　イッチー＆ハイオカ



光る球体 SOUND HUG を抱き、振動と光で音楽を身体全体に感じる体験。イッチー＆ハイオカとのコラボレーション作品で、このために作られた新たな楽曲「THE TEXTURE OF SOUND v2.0」をヘッドホンで聴きながら画面に流れる映像を見ることで、脈動と移り変わる色が身体全体を巡り、目に見えない波が、抱くことのできるものになります。

VOICE GEMS: 1000 YEAR ARCHIVE（2020〜）　ハリー・イェフ（REEPS100）＆チュン・バオ



声を立体的な形状へ変換し保存するアートプロジェクト。本作品では、中央アメリカに生息する Slate-coloured Solitaire（ツグミの一種）と、鳴鳥取引の影響により生息数の減少が懸念されるジャワ島の鳴鳥２種の声を収録し、一つの作品として提示しています。声に物理的な形を与えることで、人間を含む 300 以上の声を記録するアーカイブ活動の一環として、新たな保存のあり方を提案。失われゆく音の記憶を未来へ継承する可能性を探る作品です。

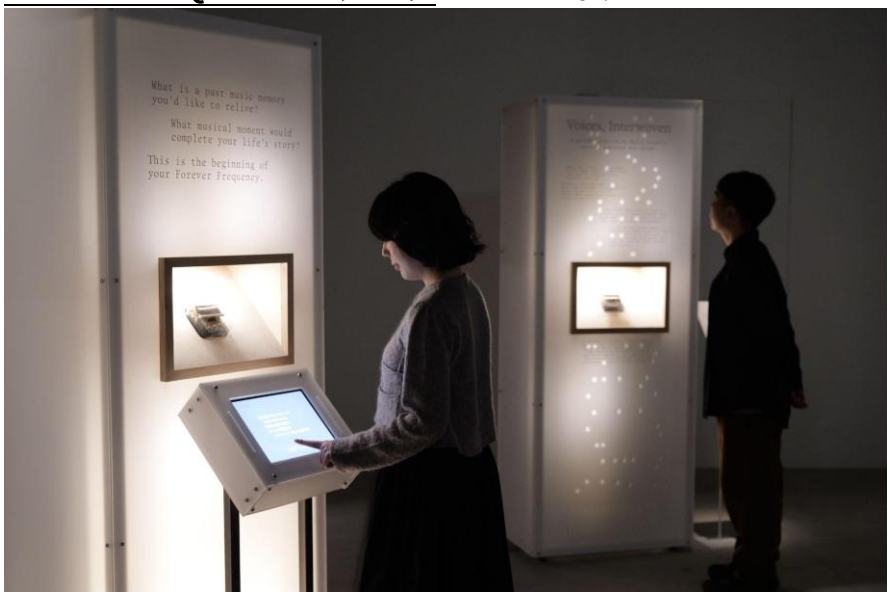
RE-FILTER（2021）　穴井佑樹



RE-FILTERは、光の色彩を音へ変換するインタラクティブな作品です。壁面に映し出された色の粒子が漂い、変化するたびに音も変わり、赤は低音、青は高音として奏でられることで、空間全体に光のメロディーが生まれます。鑑賞者の動きに反応して変化する体験を通じ、私たちがそれぞれ異なる「フィルター」を通して世界を認識しているという視点を提示。多様な知覚や他者との違いを、光と音によって直感的に体感できる作品です。

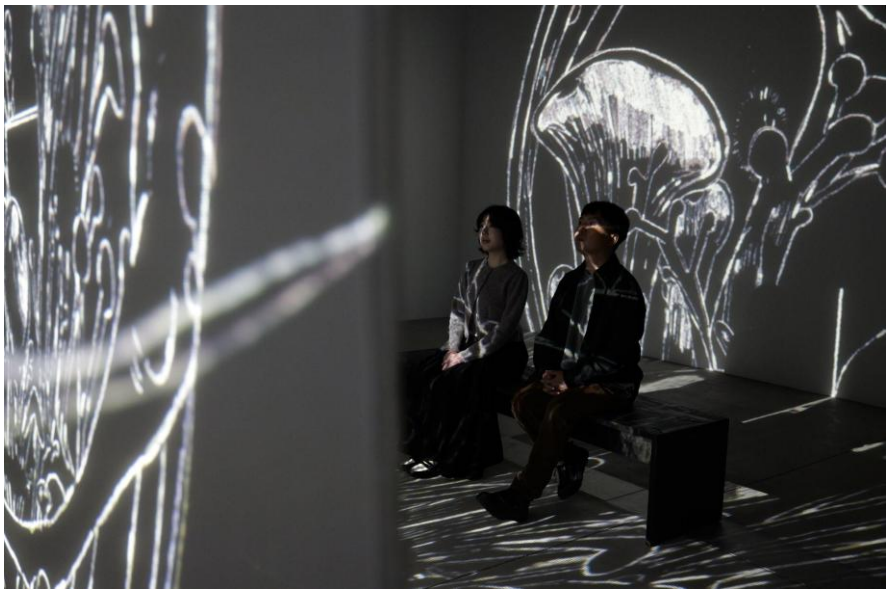
＜その他東京展での注目作品＞

FOREVER FREQUENCIES（2025）　ドメスティック・データ・ストリーマーズ



本作品は、音楽と記憶の関係をテーマにした参加型インスタレーションです。作曲家スザンヌ・チアーニ、電子音楽家・プロデューサーのマックス・クーパー、歌手マリア・アルナル、そしてミュージアムの外装設計を手がけた隈研吾が、自身の人生において音楽と記憶が結びついた瞬間を語ります。来場者は「もう一度体験したい音楽の記憶」や「人生を完成させる音楽の瞬間」といった問いに答え、その言葉を AI が分析。回答の特徴をもとに生成された旋律はオルゴールで演奏され、世界に一つだけの楽曲となります。

REFLECTIONS OF BEING（2026）　マックス・クーパー



電子音楽家であり元科学者でもあるマックス・クーパーによる参加型インスタレーション。アーティストが投げかけた「言いたくても言えないことは何ですか？」という問いに対して寄せられた無数の返答をもとに制作されました。東京展では、このプロジェクトをもとにスケールアップした新バージョンを公開。鑑賞者が作品の前に立つと、そのシルエットの中に他者の言葉が映し出され、人々の輪郭が重なり合います。語れなかった思いが共有され、無数の内なる声が出会う空間を生み出します。本作品では、日本を代表するアニメーション作家、平岡政展による手描きのビジュアルを新たに取り入れ、初のコラボレーションを実現しました。

JOYRIDE: THE TOKYO TUNER（2025）　テンポラリー・プレジャー



本作品は、廃車を素材に制作されたサウンドシステムであり、彫刻作品でもあるインスタレーションです。車が音楽を共有し、人々が集い、自己表現やコミュニティの場となってきた文化に着想を得ており、日本のチューニング文化をモチーフに構想されました。東京を拠点とする音楽レーベル TREKKIE TRAX との共同制作による本作品は、MoN Takanawa の 2F エントランスに設置され、来館者を迎えます。

※掲載の際は、各画像にクレジット© MoN Takanawa / Photo by Tiimothée Lambrecq の表記をお願いいたします。